

若菜巻の視点人物・明石君と六条院世界

——明石尼君に対する待遇表現を手がかりとして——

陣 野 英 則

はじめに

明石一族の宿願が達成される若菜巻。そこでの明石君のありように関して、これまでもさまざまに論じられているが、表現を微細に検討することによって、明石君が受け持つ重要な機能を新たに指摘できないだろうか。本稿では、待遇表現に着目することによって、明石君に与えられた機能を考察し、さらに若菜巻以降の六条院世界におけるこの人物のありようを見直してみたいともう。

『源氏物語』では、皇族、上達部、またそれに準ずる女君など、身分の高い人物が「語り手」から敬意ある待遇を受ける、といういちおうの原則があるものの、周知のようにこの原則には例外も多く、検討を要する問題となっている。特に、受領の娘であった明石君に対する待遇表現については、これまでに玉上琢彌氏^①、秋山虔氏^②、荒井弘氏^③、森一郎氏^④などの考察があり、物語世界におけるこの人物のありようの推移との相関が明らかにされている。た

だ、それら先行研究でも確認されているように、いわゆる第二部になると明石君はほぼ一貫して敬意ある待遇を受けているから、特に若菜巻での明石君のことを考えるにあたっては、明石君当人ばかりでなく、その近親の者の待遇表現にも注意する必要があるのではないかとおもわれる。父の入道、及び母である尼君に対する待遇表現については、既に玉上氏が言及されているが^①、本稿では、特に若菜巻において尼君に対する敬意があらわれた表現に着目したい。尼君がどういった視点から語られているか、それが明石君の機能を考察する上での重要な手がかりとなりそうだからである。

一 若菜巻以前の明石尼君の待遇表現

最初に、若菜巻にいたるまでの明石尼君の待遇表現を概観しておく。この人物の存在は、若菜巻、光源氏の従者の会話文によって初めて知られるわけだが、そこではいっさい敬意が示されない。また、尼君本人が物語に登場する須磨巻、明石巻においても、い

っさい敬語が用いられていない。たとえば、本人が初めて登場する箇所から引用してみよう。

①母、「あなかたはや。京の人の語るを聞けば、『源氏ハ』やむごとなき御妻ども、いと多く持ちたまひて、そのあまり、忍び忍び帝の御妻をさへ過ちたまひて、かくも騒がれたまふなる人は、まさにかくあやしき山がつを、心とどめたまひてむや」と言ふ。「入道ハ」腹立ちて、「中略」と、心をやりて言ふも、かたくなしく見ゆ。まばゆきまでしつらひ、かしづきけり。母君、「なか、めでたくとも、ものの初めに、罪に当たりて流されておはしたらむ人をしも思ひかけむ。さても、心をとどめたまふべくはこそあらめ、戯れにてもあるまじきことなり」と言ふを、「入道ハ」といたくつぶやく。

(須磨、(2)一〇二頁)⁽⁵⁾

会話文を受ける傍線部が無敬語である。中務官を祖父に持つ由緒ある家柄の女性ではあるが、尼君が物語に登場する箇所すべてをみてみると、松風巻及び若菜上・下巻の幾つかの箇所を除き、原則として敬語が用いられない人物といえそうである。そこで、これから松風巻での尼君の語られ方を検討してみたい。

次の②は、明石君と尼君が入道と別れて上京しようとする場面である。

②母君も、いみじうあはれなり。年ごろだに、同じ庵にも住ま⁽⁷⁾ずかけ離れつれば、まして誰によりてかは、かけとどまらむ。ただ、あだにうち見る人の、あさはかなる語らひだに、みなれそなれて、別るるほどはただならざるを、まして、もて

ひがめたる頭つき、心おきてこそ頼もしげなけれど、またさる方に、これこそ世を限るべき住みかなれ、とありはてぬ命を限りに思ひて、契り過ぐしきつるを、にはかに行き離れなむも心細し。⁽⁹⁾

(松風、(2)一三九頁)

ここでも尼君への敬意はみられないが、そう簡単にはいいきれないようである。傍線部(イ)は内話であるが、(ウ)の感情形容詞「心細し」には、尼君の感慨がそのままあらわされているといえそうであるし、(ア)の形容動詞「あはれなり」でも、へ語り手」の言葉と尼君の心中とが重なっているように感じられる。あらためて、(ア)以降をみてゆくと、(ウ)までの全体を、尼君自身の感慨ととらえることも可能ではないだろうか。「源氏物語」では、このように単なる三人称の叙述とか「地の文」とは呼べないような箇所がかなり多く、古注釈以来、注目されてきたのであった。この②と先の①の無敬語の表現は同質ではないだろう。

実は、②の少しあとで尼君に対する敬意があらわれているのである。

③「入道」「ゆくききをはるかに祈るわかれ路にたえぬは老のなみだなりけり
いともゆゆしや」とて、おしのごひ隠す。尼君、

もろともに都は出できこのたびやひとり野中のみちにま

どはん

とて泣きたまふさま、いとことわりなり。こころ契りか

はしてつもりぬる年月のほどを思へば、かう浮きたることを頼みて棄てし世に帰るも、思へばはかなしや。

御方、

「いきてまたあひ見むことをいつとてかかぎりもしらぬ
世をばたのまむ

送りにだに」と切にのたまへど、……

(2)―三九三―三九四頁

傍線部(エ)では、入道に対する敬語がないが、(オ)と(ク)では、それぞ
れ尼君・明石君に対する敬語がある。ここで注意したいのは、傍
線部(カ)と(キ)である。(カ)は、尼君の哀しみに共感する立場から発せ
られた言葉で、「感動の草子地」とも呼ばれるものであるが、こ
こで尼君が泣くのを「無理もない」と共感する表現主体は、まっ
たく機能的な「語り手」というよりも、むしろ尼君に共感するこ
との可能な者、たとえば、この場に立ち会い、しかも明石一族に
親近している者というように限定して考えてみることもできるの
ではないだろうか。さらに(キ)をみると、尼君に対する敬語はみら
れないものの、既に指摘があるように、先にみた②と同様、「語
り手」の言葉と尼君の心中とが重なっているように感じられよう。
この場面では、尼君の哀しみに共感する者の視線があらわになっ
ているようである。さらに、大堰の邸宅に到着するまでの箇所か
ら引用してみよう。

④辰の刻に船出したまふ。昔の人もあはれと言ひける浦の朝霧、
隔たりゆくまにいともの悲しくて、入道は、心澄みはつま
じくあくがれながめたり。こころ年を経て、いまさらに帰
るも、なほ思ひ尽きせず、尼君は泣きたまふ。

かの岸に心よりにしあま舟のそむきしかたにこきかへる

かな

御方、

いくかへりゆきかふ秋をすぐしつうき木にのりてわれ
かへるらん

思ふ方の風にて、限りける日違へず入りたまひぬ。

(2)―三九六―三九七頁

⑤尼君もの悲しげにて寄り臥したまへるに、起きあがりて、

身をかへてひとりかへれる山ざとに聞きしににたる松風

ぞふく

御方、

ふるさに見しよのともを恋ひわびてさへづることをた
れかわくらん

(2)―三九八頁

④・⑤のいずれも、一貫して尼君らへの敬意があらわれているの
だが、このあと、光源氏が大堰にやって来る場面などでは、尼君
にまったく敬語が用いられなくなり、明石君に対する敬語もわず
か一例となってしまう。つまり、敬語が安定して用いられるのは
別れの場面から大堰到着までに限られている。③で指摘した尼君
の哀しみに共感する者の視線、それはこの上京に同行した女房
(あるいは乳母)の視線と考えられないか。明石君と尼君の心情に
共感する側近の者の眼差しが汲み取れるようにおもうのである。

以上、松風巻における明石尼君らに対しての待遇表現と視点と
の相関関係をみてきた。敬語の有無が不安定な作中人物の待遇表
現を検討する際、視点の問題を看過するわけにはゆかないという
ことが確認されたかとおもう。次節では、そういった相関に留意

しつつ、若菜巻での尼君に対する待遇表現を検討してみたい。

二 若菜巻における明石尼君の待遇表現

明石尼君が若菜上巻で初めて登場するのは、十年ぶりに孫の明石女御と対面するという場面である。懷妊後、六条院に退出していた明石女御は、出産直前の二月、陰陽師らの勧めもあつて、六条院の西北の町へ移っている。

⑥ ⁽⁷⁾ かの大尼君も、今はこよなきはけ人にてぞありけむかし。

この御ありさまを ⁽⁷⁾ 見たてまつるは夢の心地して、いつしかと参り近づき馴れたてまつる。年ごろ、この母君〔「明石君」は、かう添ひさぶらひたまへど、昔の事などまほにしも聞こえ知らせたまはざりけるを、この尼君、よろこびに ⁽⁸⁾ えたへで参りては、いと涙がちに、古めかしき事どもを ⁽⁹⁾ わななき出でつつ語りきこゆ。〔中略〕生まれたまひしほどのこと、大殿の君のかの浦におはしましたりしありさま、「今は、とて京へ上りたまひしに、誰も誰も心をまどはして、今は限り、かばかりの契りにこそはありけれ、と嘆きしを、若君のかくひき助けたまへる御宿世のいみじくかなしきこと」と、ほろほろと泣けば、げにあはれなりける昔のことを、かく聞かせざらましかばおぼつかなくとも過ぎぬべかりけり、と思しうち泣きたまふ。

〔若菜上、(4)―九六―九七頁〕

傍線部(7)―(9)、いずれも尼君に対する敬意はみられない。特に注意したいのは(7)である。「かの大尼君」「ありけむかし」などの表現が、(7)の表現主体と尼君との距離を感じさせる。〔語り手〕が

尼君に対して敬意を払っていないことは明白であらう。

この女御と尼君が対座する場に、未だ明石君は不在である。このあと、女御の心中がかなり詳しく語られることとなるが、次の⑦はその直後からの引用である。

⑦ 「女御ハ」いともあはれにながめておはするに、御方参りたまひて、⁽¹⁰⁾ 日中の御加持に、こなたかなたより参り集ひ、

もの騒がしくののしるに、御前にことに人もさぶらはず、尼君ところ得ていと近くさぶらひたまふ、〔明石君〕「あな見苦しや。〔中略〕」など、なまかたはらいたく思ひたまへり。⁽¹¹⁾ よしめきそしてふるまふ、とはおぼゆめれども、もうもう

に耳もおぼおぼしかりければ、「ああ」と傾きてゐたり。⁽¹²⁾ さるはいとき言ふばかりにもあらずかし。六十五六のほどなり。

〔尼姿いとかはらかに、あてなるさまして、目つややかに泣き腫れたるけしきの、あやしく昔思ひ出でたるさまなれば、〔明石君ハ〕胸うちつぶれて、〔中略〕』と、うちはは笑みて「女御ヲ」見たてまつりたまへば、いと ⁽¹³⁾ なまめかしききよらにて、例よりもいたくしづまり、もの思ひたるさまに見えたまふ。⁽¹⁴⁾ わが子ともおぼえたまはずかたじけなきに、いとほしきことどもを聞こえたまひて、思し乱るるにや、今はかばかり、と御位を極めたまはん世に聞こえも知らせん、とこそ思へ、口惜しく思し棄つべきにはあらねど、いといとほしく心おとりしたまふらん、とおぼゆ。御加持はててまかでぬるに、御くだものなど近くまかなひなし、「こればかりをだに」と、いと心苦しげに思ひて聞こえたまふ。⁽¹⁵⁾ 尼君は、

いとめでたうつくしう見たてまつるままにも、涙はえとどめず。顔は笑みて、口つきなどは見苦しくひろごりたれど、まみのわたりうちしぐれてひそみふたり。あなかたはらいた、と目くはすれど、聞きも入れず。(4)一九八—一〇〇頁

傍線部(ウ)の直前に「御方参りたまひて」とあるように、ここで初めて明石君がやって来るわけだが、その(ウ)では、尼君への敬意がみられる。明石君が登場した途端に敬語が付くこと、さらに(ウ)から直接、明石君の会話文へとつづいていくことに注意したい。明石君は(ウ)で語られるようなその場の状況を認知したからこそ「あな見苦しや」という言葉を発しているようである。次に(ウ)であるが、ここでは尼君に対する敬語がなく、かなり揶揄的に尼君をとらえている。つづく(ウ)は、いわゆる草子地的な表現といえよう。どうやら、(ウ)、(ウ)、(ウ)は、それぞれ異なる視座から尼君をとらえているようである。つづいて(ウ)に注目すると、順接の確定条件をあらわす助詞「ば」が、明石君の「胸うちつぶれて」にかかっている。明石君は、(ウ)に語られる尼君の様子を認知したがゆえに「胸うちつぶれ」たようである。そうすると、(ウ)においても明石君の視線が感じられなくもない。そのあとの破線(テ)も、「見たてまつりたまへば」という叙述を受けていて、やはり明石君視点とおもわれる箇所であるが、これは女御の様をとらえているものである。次の(ト)では、まず感情形容詞「かたじけなき」に明石君の感慨があらわれ、さらに「……心おとりしたまふらん」までがいちおう明石君の内話と理解できるが、それを受ける「とおぼゆ」には明石君への敬意がみられない。若菜巻以降の明石君は、へ語り

手」から敬意ある待遇を受けている。この無敬語の表現は、「主観叙」あるいは「自由直接言説」と呼ばれるものに相当しよう。結局、(ト)全体を明石君の心中の言葉がそのまま剥き出しになっているものと解することができそうである。なお、(ト)では傍線部のように尼君への敬意がみられる。だが、再び尼君の様が語られる(ウ)では無敬語である。この(ウ)も、(ウ)と同様、揶揄的に尼君をとらえている。つづく(ニ)も、尼君への敬意はみられないが、ここは明石君の「目くはす」という無敬語の叙述につづいており、やはり明石君の視線が汲み取れる箇所といえよう。

以上みてきたように、⑦では、一般に「地の文」とされる箇所のうち、(ウ)・(ウ)・(テ)・(ト)あたりで、明石君の視線が汲み取れるようにおもわれる。特に(ト)は、明石君自身の心中の言葉とらえ得る箇所であろう。そこでは、尼君に対する敬語があるから、原則として明石君は母尼君に対して敬意をもっているといえそうである。したがって、(ウ)でも、明石君の立場から尼君をとらえているがゆえに敬語が用いられているものとおもわれる。なお、(ウ)と(ニ)では、無敬語で尼君がとらえられているが、いずれも明石君からすればやきもきさせられるような尼君の様を語っている箇所であるから、明石君のそうしたあせりが、敬語がないことと関係しているのではないかと考えたい。前節で検討したように、松風巻においては、上京に同行した側近の者の眼差しが活かされているため、別れの場面から大堰到着まで、敬意ある待遇が安定すると考えられたの対し、この⑦においては、尼君がほかならぬ娘の視点からとらえられているため、その意識を反映して、待遇

表現が不安定になつてゐるようなのである。語られる者と同じ場にいる者の視点が語りに活かされるといつても、松風巻とこの若菜上巻の⑦とでは、質的に異なるのである。

さらに、若菜上巻で尼君に対する敬語がみられる箇所をすべてとりあげてみよう。

⑧この大徳も、童にて京より下りける人の、老法師になりてとまれる、いとあはれに心細し、と思へり。仏の御弟子のさかしき聖だに、鶯の峰をばたどとしからず頼みきこえながら、なほ薪尽きける夜のまどひは深かりけるを、まして尼君の、悲し、と思ひたまへること限りなし。(4)——(9)——(10)頁

入道の隠遁を伝えた「大徳」の長い会話文につづく箇所である。ここでは、相対的に身分が下の「大徳」と対比されているために、尼君に敬語が用いられたようである。明石君の視点は一切関係していない。

⑨……「明石君ガ」うち忍びてものしたまへるに、「尼君ハ」といみじく悲しげなる気色にてゐたまへり。

(4)——(10)頁

入道から手紙が来たことを知らされた明石君が尼君のところへやつて来るといふ場面。傍線部は、明石君の「ものしたまへるに」といふ行為の叙述を受けており、明石君の眼が尼君の姿をとらえているように感じられる表現である。

⑩尼君、久しくためらひて、「中略」と言ひつづけて、いとあはれにうちひそみたまふ。御方もいみじく泣きて、「中略」とて、夜もすがらあはれなることどもを言ひつつ明か

したまふ。

この傍線部は、⑨のあと、尼君の長い会話文を受ける箇所であり敬語がみられる。ここでも、対座する明石君の視点が関係しているのではないだろうか。

(4)——(11)——(12)頁

⑪「紫上ニ対シテ源氏ハ」さも、いとやむごとなき御心ざしのみまさるめるかな。げに、はた、人よりここにかくしも具したまへるありさまの、ことわり、と見えたまへるこそめでたけれ。宮の御方「女三宮」、うはべの御かしづきのみめでたくて、渡りたまふこともえなのめならざるは、かたじけなきわざなめりかし。同じ筋にはおはすれど、いま一際は心苦しく」としりうごちきこえたまふにつけても、わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける。⁽⁴⁾やむごとなきだに思すさまにもあらざる世に、まして、立ちまじるべきおぼえにあらねば、すべて、今は、恨めしきふしもなし。ただ、かの絶え籠りにたる山住みを思ひやるのみぞあはれにおぼつかなき。⁽⁵⁾尼君も、ただ福地の園に種まきて、とやうなりし一言をうち頼みて、後の世を思ひやりつつ、ながめゐたまへり。

(4)——(12)——(15)頁

傍線部(ノ)は、若菜上巻で尼君に言及する最後の箇所である。直前の(ネ)に注目すると、明石君に対する敬語がない。(ネ)は二つの文から成っているが、それぞれの文末は、「恨めしきふしもなし」「あはれにおぼつかなき」というように感情形容詞が使われている。

(ネ)も明石君の心中の言葉がそのまま剥き出しになっている表現ではなからうか。そうすると、直後の(ノ)も、明石君の認知内容とし

てとらえることが可能であるようにおもわれる。

以上みてきたように、若菜上巻で尼君に敬語が付く場合は、⑧の一例だけを除き、全て明石君の視点が関係しているようである。なお、若菜下巻における尼君の待遇表現についても簡単にふれておこう。若菜下巻では、光源氏を相手にしている次のような場合には、尼君に対する敬語がない。

⑩〔源氏ハ奥ニ〕入りましたまひて、二の車に忍びて、〔源氏ノ歌、

略〕御畳紙に書きたまへり。尼君うちしほたる。かかる世を見るにつけても、かの浦にて、今は、と別れたまひしほど、女御の君のおはせしありさまなど思ひ出づるも、いとかたじけなかりける身の宿世のほどを思ふ。世を背きたまひし人も恋しく、さまざまにもの悲しきを、かつは、ゆゆし、と言忌して、〔尼君ノ歌、略〕おそくは便なからむ、とただうち思ひけるままなりけり。〔尼君ノ歌、略〕と独りごちけり。

（若菜下、(4)——一六四——一六五頁）

しかし、こういった場面以外では、原則として尼君は敬意ある待遇を受けている。

⑪……御方〔明石君〕は隠れがの御後見にて、卑下しものしたまへるしもぞ、なかなか行く先頼もしげにめでたかりける。尼君も、やもすれば、たへぬよろこびの涙、ともすれば落ちつつ、目をさへ拭ひただらして、命長き、うれしげなるためしになりてものしたまふ。

（(4)——一五九——一六〇頁）

たとえば、この⑪においては、明石君視点が関係しているとは言いがたい。若菜下巻では、他の箇所でも同様であって、どうやら

「国の母」となることが決定的な女御の祖母、ということと敬意ある待遇を受けているようである。

尼君ばかりでなく入道も含めて、明石一族への待遇表現は、『源氏物語』全体において実に不安定である。この一族に対する語りの視点はなぜ安定しないのか。それは、『源氏物語』を読み解く上での大きな課題の一つであろう。ひとくちにいうと、この一族が、物語世界の中心にいる光源氏らと懸隔をもちながらも、深層において当の中心を支えているという独自の位置にあること、それが語りのあり方と密接に関わっているに違いあるまい。が、とりあえず今は、以上みてきたような、若菜上巻での尼君の待遇表現と明石君視点との相関をふまえ、六条院世界における明石君のありようの考察に的を絞ることとしたい。

三 六条院世界における視点人物・明石君

明石君は、特に若菜上巻において、尼君をとらえる視点人物として機能しているようであった。もっとも、明石君はいわゆる第一部でも、幾度か視点を担わされていた。たとえば、既に指摘もあるように、潯標巻、住吉詣でに出かけた際にちょうど光源氏の願はどきに出くわして圧倒される場面、あるいは藤裏葉巻、成長した明石姫君及び紫上と対面する場面などである。ただし、そうした若菜巻以前の視点人物としての機能は、いま問題にしている若菜上巻における機能と較べ、かなり異質であろう。若菜巻以前では、結局のところ、「身のほど」を思い知らされるという展開の中で明石君の視線が活かされるのだが、若菜上巻の尼君に対

する眼差しには、引用文⑦において顕著だったように、いわば冷静な厳しさがある。もちろん、そこでは、秋山虔氏も指摘されるように、「后への道をひたすらに歩まねばならぬ高貴の女御であるべき」娘に尼君が接近することを忌む、という当人の意識がはたらいている。それ自体が「身のほど」意識と無縁ではないのだが、ともあれ、明石君が老母に向かって批判的な眼差しを向けていることは確かなのである。

それでは、尼君以外の人物に対して、明石君はどのような姿勢でいるのだろうか。実は、若菜上・下巻において、明石君視点が尼君以外の人物をとらえている箇所というと、娘の女御、及び光源氏への眼差しを感じさせる箇所があるぐらいであって、かなり限られている。よって、野分巻以来しばしば〈見る〉人物としての機能を与えられている夕霧のような〈眼〉を獲得しているとまではいえない。しかし、身近な人に対してのみ、その傍らで冷静に見つめるという姿勢を示すのだ、といってしまうと、その機能を過少評価することになりはしないか。

もう一度、引用文⑩にたちかえてみたい。(X)の「しりうごちきこえたまふ」で受ける明石君の会話文は大いに注意すべきであろう。⁽¹³⁾明石君は、紫上・女三宮を論評するような調子で「しりうごち」をしている。明石君は、その「身のほど」ゆえに、元々傍らにありつづけてきた存在であったが、六条院の他の御方々をみつめ、論評できるような立場にはなかった。女御の後見役となり、その懷妊のため東南の町へ入る機会があったことなどによって、傍らにありつづ、しかも他者をみつめる〈眼〉を獲得したも

のと考えられよう。秋山虔氏も、ここでの明石君が観察者たりえていることに注意されているが、ここで確認しておきたいのは、明石君が六条院世界の危うさをいち早く察知しているようにおもわれるということである。次の⑭は、明石女御の出産の前年、紫上と女三宮の初めての対面が語られた直後の箇所からの引用である。

⑭世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあたりのことは、言ひあつかふものなれば、はじめつ方は、「対の上、いかに思すらむ。御おぼえ、いとこの年ごろのやうにはおはせじ。すこしは劣りなん」など言ひけるを、いますこし深き御心ざし、かくてしもまさるさまなるを、それにつけても、またやすからず言ふ人々あるに、かく憎げなくさへ聞こえかはしたまへば、事なほりてめやすくなむありける。

(若菜上、(4)―(八五頁))

傍線部では、光源氏の紫上に対する愛情がより深まったことについて、かえて「やすからず言ふ人々」がいたものの、紫上と女三宮が仲よくつきあっていることから良からぬ噂も消えていったということが語られている。口さがない「世の中の人」たちでさえ噂にしなくなった六条院世界の危うさについて、物語の中で、あらためて最初に言及する人物が、ほかならぬ明石君なのであった。つまり、かの夕霧にも先立って、客観的な視座から、光源氏・紫上・女三宮という三者のありようをとらえていたわけである。⁽¹⁵⁾さらに、⑮で問題とすべきは、(X)の「しりうごちきこえたまふ」という言葉そのものであろう。ごく親しい女房を相手に陰

口を言ったのであろうか。この「しりうごと」からは、物語世界の出来事を見聞したとして設定されているらしい語り手たちの情報交換の場さえ想起させられはしないだろうか。もちろん、明石君が「語り手」になったということではない。ただ、物語世界の中にありながら、六条院の主要人物たちをみつめつづける女房たちの位置に近づいた、という感はずいぶんよいにおもわれる。

おわりに

若菜巻における明石君というと、阿部秋生氏の綿密な論考以来、殊に、引用文⑩にみえる「わが宿世はいとたけくぞおぼえたまひける」及び「すべて、今は、恨めしきふしもなし」という当人の感慨が注目されてきたわけであるが、これらは、六条院世界の中で、他者を冷静にみつめることのできる位置を獲得した、その自持の気もちのあらわれとして理解する必要があるのではないかとおもわれる。

光源氏中心の六条院世界の相対化が進められてゆく若菜巻では、物語の視点自体にも同様の相対化が指摘できそうである。つまり、『源氏物語』のいわゆる第一部では、光源氏が視点人物としても絶対的な位置にあったわけであるが、玉鬘十帖以降、特に若菜巻に入ると、幾人かの主要人物たちがしばしば視点人物として重要な機能を果たすようになる。明石君も、そうした視点を担う一人として、光源氏中心の物語内容はもちろんのこと、光源氏を軸とした物語の言葉・表現のあり方をも相対化する役目を果たすのである。だが、その一方で、明石君の新たな視点の獲得は、当の明

石君自身をも相対化させているようである。というのも、この人物の場合、これまで検討したように、新たな視点の獲得が、いわば黒子的な女房の位置への接近をも意味しているようにおもわれるからである。宿願達成によって明石一族の物語は終焉を迎えると同時に物語は、新たな機能を与えることによって、明石君という女君をも表舞台から退場させているということになるのか。

注(1) 玉上琢彌「敬語の文学的考察——源氏物語の本性(その二)

六。——」『源氏物語研究 源氏物語評釈別巻一』、角川書店、一九六〇。

(2) 秋山虔「源氏物語の敬語」『王朝の文学空間』Ⅲ—13、東京大学出版会、一九八四。

(3) 荒井弘「源氏物語の待遇表現について——明石御方の場合——」『学習院大学国語国文学会誌』二二、一九八〇・三。

(4) 森一郎「源氏物語の表現構造としての敬語法——場面空間・表現空間の造型性——」『源氏物語生成論——局面集中と継起的展開——』Ⅲ、世界思想社、一九八六、同「源氏物語の主題と表現世界——人物造型と表現方法——」(勉誠社、一九九四)。

(5) 引用本文、及び(一)内の巻数・頁数は、日本古典文学全集本(小学館、一九七〇—一九七六)に拠る。ただし、表記を改めた箇所が若干ある。なお、(一)内はすべて引用者による注記である。

(6) 中野幸一「『源氏物語』における強調・感動・傍観の草子地」『源氏物語探究会編「源氏物語の探究」第三輯、風間書房、一九七七。

(7) たとえば、日本古典文学全集本(2)―三九四頁)の頭注に「尼君の心中に密着した語り手の感想」とある。

(8) なお、この場面でも入道には敬意が示されない。だが、藤原克

己氏が「明石入道の人物造型——その〈典型化〉の方法——」（森一郎編『源氏物語作中人物論集』、勉誠社、一九九三）で指摘されるように、松風巻では、明石巻での「なまぐさい出家者」を戯面化するような「皮肉な語り口」がいつさき感じられまい。場面の性質からして当然かもしれないが、やはり視点の問題が絡んでいるよう。

- (9) 榎本正純氏は、「源氏物語の草子地」（『源氏物語の草子地 諸注と研究』研究編、笠間書院、一九八二）で、「かし」が下接した場合、「語り手と対象との距離」が「けむ」「めり」などよりさらに大きくなる、とされている。

- (10) 島津久基『対訳源氏物語講話 巻二』（中興館、一九三六）の一〇六—一〇七頁、同「敬語要記」（『日本文学考論』、河出書房、一九四七）、及び三谷邦明『源氏物語の〈語り〉と〈言説〉——〈垣間見〉の文学史あるいは混沌を増殖する言説分析の可能性——』（三谷邦明編『双書〈物語学を拓く〉1 源氏物語の〈語り〉と〈言説〉』、有精堂、一九九四）など。

- (11) 三谷邦明「源氏物語の言説分析——語り手の実体化と草子地あるいは澤標巻の明石君の一人称的言説をめぐって——」（『国文学研究』一一二、一九九四・三）。

- (12) 秋山虔「外的時間と内的時間 「若菜上」巻における明石物語、その一」（『国文学』一五一六、一九七〇・五）。

- (13) 「細流抄」では、「さも、いとやむごとなき……」以下を「あか

しのうへの心也」（伊井春樹編『源氏物語古注集成7 内閣文庫本細流抄』、桜楓社、一九八〇、二七七頁）としているが、これは会話文であろう。

- (14) 秋山虔「源氏物語の方法に関する断章——「若菜」巻における明石物語・続——」（紫式部学会編『源氏物語とその周辺——古代文学論叢第二輯——』、武蔵野書院、一九七二）、同「源氏物語「若菜上」巻の一問題——出来事の時間と言説の時間——」（山岸徳平先生記念論文集刊行会編『日本文学の視点と諸相』、汲古書院、一九九二）。

- (15) もっとも、この⑭の直後では、女三官方の様子をうかがい、光源氏の愛情が特に深いわけではないことを看破する夕霧のことが語られる。つまり、しばしば視点を担わされる人物にあきわしく、夕霧も明石君と同じ時期に六条院の変容を認知していたわけであるが、それでも、明石君の認知の方が先に提示されて物語が展開してゆくことには注意すべきであろう。

- (16) 阿部秋生「明石の君の物語の構造」（『源氏物語研究序説』第二篇—第五章、東京大学出版会、一九五九）。

〔付記〕

本稿は、一九九五年度早稲田大学国文学会秋季大会における口頭発表をもとに成稿したものです。質疑を賜りました吉井美弥子氏、また発表に先立っていろいろと御教示下さいました方々に深く感謝申し上げます。

寄贈図書（一九九六年三月）

『うたの生成・歌のゆくえ』

内藤 明氏

『森鷗外 明治知識人の歩んだ道』

『源氏物語 感覚の論理』

三田村雅子氏

森鷗外記念館

山崎一頼氏

『太閤記 新日本古典文学大系60』

江本 裕氏

『凡常の発見 漱石・谷崎・太宰』

細谷 博氏

『圖書寮叢刊 書陵部蔵書印譜上』

宮内庁書陵部

『源氏研究 第1号』

三田村雅子氏

『時間の観察者 われを通るものⅡ』

牛山 睦子氏

『新武道伝来記 言語文化研究叢書1』

杉本 好伸氏